

人文研がホームページで公開している故西川長夫さん撮影の1968年5月のパリ



パリ五月革命から50年

京大人文研、10日から連続セミナー

68年現代社会の「原風景」

パリ五月革命から50年に合わせ、京都大学文学部人文科学研究所は10日から連続セミナー「68年5月」と私たち」を開く。世界的な「反乱の年」として記憶される1968年だが、日本においては挫折のイメージがつきまとい、ノスタルジックの対象として語られがちだ。セミナーは68年を現代社会の「原風景」として捉え直し、当時の政治と思想の多角的な検討を通して、その遺産の功罪や現代的意味について考える。

五月革命は、パリの学生たちのデモに始まり、最終的にはフランス全土のゼネストにまで発展した。それまで政治家が独占してきた「政治」に、観客にすぎなかった学生や大衆が大学キャンパスや街頭を舞台に主役として躍り出た象徴的な出来事として記憶される。年は政治史・社会史・文化史上の転換点とされる。企画者の一人、人文研の王寺賢太准教授は「68年の思想は、その後の反差別運動やマ

思想を多角的検討

同時期に、西側諸国ではベトナム反戦運動が高まり、中国では共産党エリートを弾劾する「文化大革命」が進展した。日本でも、非共産党系の新左翼運動が高揚し、既存の秩序への異議申し立てが相次いだ。また、反権威主義的な姿勢は「カウンター・カルチャー」とも影響し合い、68

る。同時期に、西側諸国ではベトナム反戦運動が高まり、中国では共産党エリートを弾劾する「文化大革命」が進展した。日本でも、非共産党系の新左翼運動が高揚し、既存の秩序への異議申し立てが相次いだ。また、反権威主義的な姿勢は「カウンター・カルチャー」とも影響し合い、68

ことへの闘争だった。大学と社会の関係を見つめ直す機会にしたい」と話している。会場は人文研本館のセミナー室。会期中、ホールに人文研が所蔵する「西川長夫・祐子旧蔵パリ五月革命文庫」の写真やポスターなどを展示する。

(阿部秀俊)

<68年5月>と私たち

- 10日 佐藤淳二・人文研教授「68年から人間の終わりを考える」、小泉義之・立命館大教授「1968年後の共産党」
- 17日 上尾真道・京都大研究員「68年5月と精神医療制度改革のうねり」、立木康介人文研准教授「精神分析の68年5月—『ラカン派』の内と外」
- 24日 佐藤嘉幸・筑波大准教授、廣瀬純・龍谷大教授「ドゥルーズ—ガタリと68年5月」
- 31日 田中祐理子・人文研助教「<学知ってなんだ>: エピステモロジーと68年」、王寺賢太・人文研准教授「京大人文研のアルチュセール」
- 6月9日 布施哲・名古屋大准教授「イギリスのポスト68年」、市田良彦・神戸大教授「68年のドンキホーテ」

※各日とも午後6時から(6月9日のみ午後2時から)。申し込み不要、無料。